

令和2年度(2020年度)伊丹市立松崎中学校 自己評価・学校関係者評価

1 校訓

盡 己

2 学校教育目標

すべてのことに全力で取り組む生徒の育成

3 本年度の経営方針

校訓「盡己」の具現化をめざして、授業、行事、部活動を教育活動の3本柱とし、「一生懸命勉強する」「優しい心を持つ」「感動する」生徒を育成する

4 自己評価結果

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点の評価	目標達成度	課題・改善方策
	生徒	保護者	教職員						
「一生懸命勉強する」 生徒の育成	④ ～ ⑥	② ～ ④	④ ～ ⑥	①学力が身につく 授業実践	教員の授業力向上	・教科部会を定期的にもち、よりよい授業を目指して教科内で協議した。 ・校内研究授業を二回実施した。 ・公開授業週間を設け、同じ教科の授業と他教科の授業の授業見学を行い、アドバイスをを行う形を取った。 ・「授業は楽しく、わかりやすい」という問いに肯定的な回答をしている生徒が31年度は78.6%であったのに対し、令和2年度は72.2%と、約6ポイント下がっている。「先生はいろいろ工夫して教えてくれる」という問いに肯定的な回答をしている生徒が31年度は89.3%であったのに対し、令和2年度は88.6%と、約0.7ポイント下がっている。「授業内容でわかりにくいことについて、先生に質問しやすい」という問いに肯定的な回答をした生徒が、31年度は69.7%であったのに対し、令和2年度も66%と、約3.7%下がっている。	2		【課題】 ・新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、生徒同士の対話や教師との対話が行いづらくなっている。 ・タブレットの活用 ・全国学力調査においては、記述式の問題に課題があり、授業における発表や順序立てた説明等への苦手意識に繋がっている。 【改善方策】 ・基礎基本の学力の定着。 ・小テストの実施。 ・生徒の理解が深まる授業づくり。 ・ICT(タブレット)端末を効果的に活用し、生徒同士の考えを共有したり、教師が生徒の考えを把握して個別指導を行っていく必要がある。 ・課題の質の向上及びICT機器を積極的に活用するなどにより、家庭学習の充実を図る。 ・「ねらい」の提示の徹底、及び「ふりかえり」の更なる場の設定
					計画性を持った研修の実施	・臨時休業中に受けてみたい研修内容のアンケートを実施した。 ・新型コロナウイルス感染症の関係で、夏季研修会をZOOMを用いて行った。また、総合教育センターの夏季研修講座を一人二つは視聴し、レポートの提出を求めた。 ・プチ研(自主研修会)を企画し、校内の若手教員のための研修を行った。			
					深い学びを実感させる授業実践	・授業の「ねらい」を提示し、まとめとして「ふりかえり」の場を意識して設定することができた。 ・「学校は積極的に読書に親しむ機会を設けている」が上昇しており、読書貸出冊数の増加が見られ、今後の効果が期待できる。			
	⑦	⑤		②読書活動	図書室の整備	・新型コロナウイルス感染予防対策として、消毒薬と手洗い場石けんの設置をした。また、本年度からの利用ルールとして、入退出時には手洗い、消毒を徹底するよう周知した。 ・新型コロナウイルス感染予防対策として、返却ワゴンを設置した。カウンターでは貸し出しのみを受け付け、生徒の導線を変更することで、より安全に利用できるようにした。 ・図書館教育担当者と学校司書、図書館ボランティアとの連携を図り、クリスマス限定しおりや図書館おみくじといったグッズをプレゼントするなど、生徒が入室しやすい図書室作りを行った。	3	3	【課題】 ・「学校は朝の読書や、図書室の利用などに力を入れている」と肯定的に回答した生徒は79.7%で、前年比+2.1%だった。「学校は読書に親しむ機会を設けている」と肯定的に回答した保護者は82.1%で前年比+5.4%だった。生徒のポイントが上がった理由として、本年度より図書館だよりを毎月発行していることが影響したと考えられる。今後は図書館運営の充実を図るとともに、朝読書のあり方について検証する必要がある。保護者のポイントが上がった理由は、図書館だよりの発行間隔が狭まったことで、昨年より図書館教育の取り組みが保護者に周知でされつつあると考えられる。 【改善方策】 ・図書委員会を中心に課題を掘り起こす必要がある。 ・図書館だよりを継続して定期的に発行し、あらゆる情報提供に努める必要がある。
					読書量の向上	・2ヶ月間の臨時休業や学年別分散開館、図書館祭りの中止など図書室利用上の制限があったにもかかわらず、貸出冊数(4～12月)は、8316冊で昨年度7219冊より+1097冊と増加(3年連続)した。 ・貸出冊数増加の要因として、学年別分散開館の影響が考えられる。従来であれば、どの開館日でも利用できたがために後回しになっていた図書室訪問が、学年別で3日に1度しか入出できない制限下ゆえに、入出可能な日にこそ利用しようという雰囲気醸成された。また、朝読書時に図書委員から開館日の声かけをしたことで、従来であれば図書室で本を借りなかった層の生徒の呼び込みにも繋がった。			

「一生懸命勉強する」 生徒の育成	⑬ ⑭	⑩ ⑪	⑪	③進路指導	進路指導体制の充実	・学年主任が進路指導主事経験者であり、進路指導主事が昨年度から継続して担当、また副担任が3年担任経験者であることから、担任をバックアップする体制が整っている。さらに、経験豊富な担任が率先して懇談の準備などを進め、経験の浅い担任も念入りな準備や懇談の実施ができた。 ・県外受検の手続きや調査書のパソコン入力など、3年職員が分担して組織的に業務を行った。特に、パソコンに秀でている職員の存在が大きい。 ・公立高校のオープンハイスクールが定員制のところ、先着順の学校については、放課後にパソコン室を開放する措置を行った。	3	【課題】 ・新型コロナウイルスによる影響で、公立高校のオープンハイスクールが8月31日まで中止となり、参加する機会が減った。また、私立高校のほとんどで、面接の中止や出願方法の変更があり、受験生にとって不安な1年間であった。 ・保護者対象の進路説明会の実施方法も、例年にはない配慮が必要であった。 【改善方策】 ・公立のオープンハイスクールは、県教育委員会により各高校に、9月以降2回以上の実施を要請。ほとんどの高校はその要請を受け入れたため、生徒の多くは第一志望にしたい高校は見学できた。 ・保護者説明会の会場設営等の運営について、今後の状況も鑑み、市教育委員会のガイドラインに基づき、窓を開放したり座席間隔を保つことなど対策を講じながら実施する。 ・未履修分も含め授業の遅れは解消できたが、学習内容を定着させ学力向上につなげる必要がある。	
					生徒・保護者への情報提供	・休業期間中に進路懇談を実施し、早い段階から家庭で進路の話を進められるようにした。 ・進路通信を不定期に発行し、最新の情報をリアルタイムで発信した。 ・保護者を対象とした進路説明会を新型コロナウイルス感染症拡大防止に配慮しながら、例年通り2回実施することができた。 ・学校厚生会OHS保険の周知と、説明会開催、集金送金業務。教育振興会奨学資金の案内と手続き等、各種手続きを行った。 ・キャリア学習ノートを活用して指導できた。			
		④		④学習タイム	系統的・継続した実施	・新型コロナウイルス感染症の影響による授業の遅れを取り戻すための45分7校時授業実施に伴い、今年度の学習タイムは未実施。結果全教科ともに未履修分を含め年間指導計画通りに進んだ。 (保護者アンケート「先生は学力向上のため、授業の工夫に努めている」は、R1年度76.8%が、R2年度80.3%に上昇)			
学校関係者の意見				【良い点】 ・コロナ禍により、先が読めない中、教師が前向きに行事等工夫して取り組みをした。 ・図書室に足を運んで、本を借りやすい雰囲気醸成されたこと、読書に時間を割く生徒が増えたことは良いことだと思います。 ・自主研修会をすることで、教師間の人間関係が築け、協力体制ができるので継続してほしい。 ・目標が具体的にわかりやすい。 ・図書の利用が多いので、学力に繋がるとよい。 ・校舎内は清潔で気持ちよい。教室も整理・整頓されている。 ・図書館だよりの発行を定期的にし、保護者にも活動内容がよくわかった。 ・進路指導も子どもにあった情報を的確にし、進路だよりも読みごたえがあり、内容が充実している。		【課題】 ・ICT(タブレット)を使っでの授業への工夫、及び家庭学習への導入についての研究、研修 ・土曜学習の休み時間に、夏目漱石の文庫本を読む生徒を見つけて「すごいなあ」と思いました。しかし、よく聞けば、意味の分からない単語を読み飛ばしていると知り、意味がないなあと思います。 ・アンケート調査結果をふまえた自己評価としては不十分である。例えば、「授業は楽しく、わかりやすい(生徒)…」とても当てはまる25.3%(H30)→21.4%(R1)→19.6%(R2)」と毎年、落ちている所に目を付けて徹底的な分析をする必要がある。 ・校内研究の自己評価が明確に示されておらず、授業に関するアンケート調査結果の落ち込みが研究体制の実態を表していると考えられる。 ・コロナ禍で、授業時間確保もできたが、その中で子どもがどれだけ理解し身についているのか不安。 ・高校のオープンスクールも通常よりも人数制限等があり、希望の学校への参加ができず、満足できるものではなかった。		【改善策】 ・辞書を引くことの大切さを、もっと教えるべきではないかと思います。国語にせよ、英語にせよ。 ・授業、行事、部活動などの教育活動におけるカリキュラムマネジメントの推進が望まれる。	

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点の評価	目標達成度	課題・改善方策
	生徒	保護者	教職員						
「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成				①部活動	部活動の活性化	・部活動数18は市内最多であり、活発に活動している。 ・総合体育大会実施されなかったものの、新人大会では3つの部活動が阪神大会で入賞した。 ・ノー部活デー（毎週平日と休日に1日ずつ）を設定して、適度な休養を設け、けがの防止や効率的な体力の向上に努めた。 ・Zoomでの集会や体育館での表彰を通して活動実績を紹介し、全校生で共有することができた。また、学校便りにも活動実績を掲載した。	3		【課題】 ・入部率が昨年度81.9.%から、本年度80%となり、若干ではあるが減少した。 ・ノー部活デーが増えたため、継続的な指導による技術の向上が難しくなっている。 【改善方策】 ・部活動の意義を伝え、入部後は継続する事により得る力や達成感、充実感を感じられるように指導する。 ・参加する大会や行事の精選が必要である。
					部活動をとおしての仲間づくり	・部活動加入率は80%だった。 ・今年度はコロナウイルス感染症に伴い、例年のように地域行事に参加する機会が少なく、地域の小学生や大人との交流機会があまり多くなかった。			
	③	③	③	②学校行事	生徒の自己存在感、充実感、達成感の育成	・「学校行事は楽しい」と解答した生徒は75%となっており、昨年度の82%と比べ、大きく下がっている。しかしながら新型コロナウイルス感染症の影響にも関わらず多くの生徒が前向きに取り組むことができた。 ・「子どもは学校行事に積極的に参加している」と回答した保護者は88.9%であり、昨年度の93%と比べ下がっている。生徒、保護者ともに学校行事を楽しむにしている割合が高いと考えられる。 ・今の状況でも生徒の自己存在感、充実感、達成感を育成するための手立てを考えて、行事のやり方を今後さらに工夫、改善する必要がある。	3		
	⑩ ⑪	⑦ ⑧	⑦ ⑧	③生徒指導	生徒指導体制の整備	・教員の空き時間における校内巡視を行った。 ・SSW、SC、関係機関と連携して生徒と関わりを持つことができた。 ・ふれあい相談員を活用し、校内巡視、家庭訪問、別室対応など多岐にわたって連携することができた。 ・週1回の生徒指導委員会での内容を、学年会等で伝達し、共通理解のもと指導、対応することができた。 ・生徒指導事案が発生した後、迅速に学年職員で情報共有する場を設定することができた。 ・生徒情報フォルダを作成し、どの職員も個々の生徒への指導内容を把握することができた。 ・担任や部活動顧問だけが抱え込むのではなく、学年生徒指導、学年主任、生徒指導主任、管理職が連携し、組織的な対応を行うことができた。 ・風紀委員会と連携して校則の改正や、制服、制カバンの改定をすすめることができた。	3		
					いじめ、問題行動への迅速な対応	・学期に1回いじめアンケート調査、教育相談を行い、生徒の実態把握に努めることができた。 ・いじめ対策委員会を定期的に開催し、学年の現状を情報共有したり、今後の取組について協議することができた。 ・いじめ防止強化週間（年2回実施）では、生徒会本部と連携して挨拶運動（グリーティングカップ）や、学級での交友行動（グリーティングカード）を通じて生徒の仲間意識を向上させることができた。 ・携帯、スマートフォンによるいじめ、問題行動防止に向けた講演会を2回、近年増加傾向にある薬物の使用を防止する講演会を1回実施した。 ・週に1回、生徒の心境を知る（ニコちゃんマーク）ことで、トラブルの未然防止や心の変化に気がつくことができた。 ・いじめや問題行動が発生した際は、職員間で連携して被害生徒、加害生徒への聞きとりを行い、再発防止に努めた。			
不登校への計画的な対応					・関係機関と連携しながら、個々の生徒に合わせた指導を行うことができた。 ・「教育支援センターやまびこ」と密に連絡をとることができた。 ・別室利用するにあたっての流れ（手順）を明確化した。 ・別室登校や時差登校をすすめ、登校を促すことができた。 ・別室利用生徒一覧表を作成し、利用状況を全職員が把握できるようにした。 ・別室利用の生徒向けに、記録表を作成することで、担任、生徒指導担当が別室登校生の学習内容を把握しやすいようにした。				
家庭との連携					・電話連絡、家庭訪問、教育相談等を徹底することができた。 ・生徒の学校での様子、家庭での様子を情報共有することができた。				
				生徒理解のための取組	・学期に1回教育相談週間をもうけ、事前に記入した教育相談アンケートをもとに担任が面談を実施し、生徒のメンタル面の状況把握に努めた。 ・QUを6月と11月に行い、生徒の心的変化の早期発見につなげるようにした。そして、これらの情報を学年会議などで共有を図った。		3	【課題】 ・「先生は生徒の悩みや不安に対して相談にのってくれる」というアンケート項目に対する肯定的な回答は約83.4%と昨年より1.6%低下している。また、保護者に対する「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」という項目の肯定的な割合	

「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成	⑫	⑨	⑨ ⑩	④教育相談	スクールカウンセラー等との連携	・生徒や保護者に対するカウンセリング、教員へのコーチングを週1回の訪問日に行い、適切な助言を受けることができた。 ・一昨年から派遣されたSSWによる教員への助言、ケース会議の実施、週1回の生徒指導委員会での情報提供などで就学困難生徒への支援をより細かく実施することができた。さらに、伊丹こども福祉課、川西こども家庭センターとも連携を密にすることができた。	3	が65.5%と昨年とほぼ変化はないが、一昨年度より6%低下していることから改善が必要だと考えられる。 【改善方策】 ・保護者に対しては引き続きあらゆる機会を通じて、本校の相談体制の説明を行う。 ・教師側は一人ひとりが自発的な研修等を通じて見識や視野を広げ、教養を深めることでより深く生徒との信頼関係を構築できるように努める。	
			⑮ ⑯	⑤特別支援教育	指導体制の確立	・特別支援コーディネーターを中心に教育支援委員会を開き、支援の必要な生徒の実態把握を行った。支援の必要な生徒については、授業の様子やその他の学校生活の様子を総合的に考慮し、支援内容の検討を行った。 ・特別支援教育支援員が、通常学級の支援を要する生徒に対して計画的な支援を行い、状況を学級・教科担任に活動報告として伝え、指導に活用した。 ・小学校から通級指導を受けている生徒の継続に加え、中学校でも個別の指導が必要な生徒には、通級指導も選択肢の一つとして保護者に提案した。 ・医療発達相談や巡回相談を積極的に活用し、学習に困難を抱える生徒に適切な支援を行えるよう専門的な立場からアドバイスを受けた。 ・特別支援教育の職員研修を行い、指導について職員の理解を深めた。 ・生徒が抱える問題に適切に対応するため、SSW、少年愛護センター、SC、阪神北少年サポートセンターなど、関係機関と連携し、必要な支援を行った。	3	【課題】 ・学級担任が個別の指導計画を丁寧に作成しており、卒業時には確実に次の学校等へ引き継げるようにはしているが、中学校3年間の中での支援対象生徒に対する継続した支援には充分活用できていない。 ・生徒アンケートの中で「授業はたのしくわかりやすい」の質問に対して、否定的な回答をした生徒がやや増えている。その中には「わかりたくてもわからない」生徒が一定数いると考えられる。 【改善方策】 ・学期ごとや学年が上がるごとに、学年会等で個別の指導計画を用いた情報共有を図る。 ・通常学級生の中にも、授業やその他学校生活の中できめ細やかな声かけや支援をする必要のある生徒が増えている。「わかりたくてもわからない」生徒への支援のあり方を、各学級担任や各教科担任だけでなく、学年全体、学校全体で検討していく必要がある。	
	② ③ ⑦ ⑧ ⑮ ⑯ ⑰	② ③ ⑤ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱	③ ⑫ ⑮ ⑰ ⑱	⑥生徒会活動	生徒会活動の活性化	・限られた状況下で学校運営へ参加し、自己有用感や学校の一員である自覚を育成した。 ・毎朝、生徒会役員が挨拶運動、国旗・市旗・校旗の掲揚を行った。 ・各学級評議・美化委員が朝清掃、風紀委員が挨拶運動を交代で行った。 ・自治活動として、全校集会の司会、整列・退場指示を生徒会役員が行った。 ・生徒総会や会長の話を通して、全生徒が会員であることを意識づけた。 ・生徒会本部や各委員会が主体となった取り組みを進めることで、企画力や実行力をもったリーダー育成を目指した。 ・いじめ防止強化週間で「知ろう！なくそう！コロナウイルス差別！」「Greeting Cup」および「Greeting Letter」を企画・実施した。 ・行事での進行や毎月の評議専門委員会を計画的に実施した。 ・生徒会や委員会の活動が学校生活の支えであることを意識づけ、生徒会活動を極力実施するようになった。 ・オンラインによる生徒総会や生徒会選挙、全校集会を実施した。 ・保健委員会を中心に、各委員会において感染症予防に対応した活動を盛り込んだ。	3	【課題】 ・新型コロナウイルス感染症の影響により、生徒会活動自体と生徒主体的な取り組みをする機会が減った。 ・学校行事には楽しく取り組んでいるが、自己有用感や思いやりの心の育成につながっていない。 ・学校へ行くのが楽しい・行事が楽しいの2項目について、全体的に数値が前年度より下がった。 ・実施されなかった行事の継承性の確保。 【改善方法】 ・可能な限り生徒会活動を実施し、生徒が主体的に取り組める機会を増やす。 ・思いやりの心や自己有用感を高める取り組みを実施する。 ・継承すべきものは継承するが、新しいものを作り上げていく精神で取り組む。	
	⑮	⑬	⑬	⑦健全な食生活	早寝・早起き・朝ごはんへの取組	・教科指導において、偏りなく栄養摂取ができるバランスのよい食事について食育指導を行った。	3	【課題】 ・「早寝・早起き・朝食、規則正しい生活」については、昨年度81.6%だったが今年度は76.1%と5.5%下がった。給食指導や保健指導等を通して朝ご飯の大切さや規則正しい生活を呼びかけているが、生徒たちの家庭での生活を把握しきれておらず、個別の声かけなどができていないことも原因として考えられる。 【改善方策】 ・睡眠時間や朝ご飯を食べているかなど、生徒の生活実態を把握する必要がある。 ・規則正しい生活の重要性の指導を行う。 ・PTAと協力して、早寝・早起き・朝ごはんの啓発活動を行う。	
学校関係者の意見				【良い点】 ・従来の形での行事が出来ない中、代替行事等工夫して実施したのは良かった。 ・不登校生に時差登校や別室登校を勧めていること、親子そろって或いは両親そろって放課後にやってきてスクールカウンセラーやクラス担任と話をしている様子、よく見かけます。学校は、ちゃんと動いていると拝察します。 ・全体できなくても学年別で結束し、工夫を凝らし、喜びを見だし達成感を味わい、自信に繋がっている。 ・部活動では、立派な成績で頑張っている。 ・生徒会活動も自主的に活動し素晴らしい。 ・コロナ禍で学校の先生は、子どもたちのために考え行事等を行ってくれたことに満足		【課題】 ・自己有用感を持たせ、それを学習意欲や生活意欲にどう結びつけられるか。 ・いろいろ対応しても、不登校状況から抜けられない生徒が各学年ともいるようです。人間関係で悩んでしまうのは別として、学力面で「ついていけない」と悩んだり、宿題を提出することができなかつたりすることで、学校に行きたくなくなったりするならば、少しでも学力の面で何らかの形でフォローする必要があると思います。 ・不登校が多い。学校やSSWの週1回の訪問の関わりでは足りない。不登校生のこれからの人生をどこか進路を繋げてほしいのでSSWを増やしてほしい。 ・生徒指導イコール問題行動対応であるとの勘違いをしている状況があるのではないか。教師アンケート「学校は、問題行動に対する指導体制が整備されている…とても当てはまる0%」がそのことを示している。各教員が生徒指導が機能する授業を実践することによって、指導体制の基礎ができる。このアンケート結果は、授業で生徒指導が機能していないことを示すものであり、全教員が自覚して責任を果たしていない証拠でもある。授業、行事、部活動などの教育活動の中で、生徒一人一人の良さを見つけることができず、問題行動にばかり目を向けた一律的な指導に陥り、問題行動の発生や学校に居場所を持つことができない生徒の増加につながっていると考えられる。 ・PTAとして保護者との連携不足		【改善策】 ・生徒全員を同じ土俵に立たせて、横並びで同じ課題を与えて、いついつまでに提出させる……それを平等というのかもしれませんが、その子の能力に見合った学習の仕方を提示するべきではないでしょうか。きちんと基本を理解できないまま解き進めて、結局答えは間違っていて、未消化のまま課題を提出しておしまい……では、机に向かっている時間がむなしいような気がします。 ・生徒が、共感的人間関係を構築し、自己決定ができ、それができたことによって自己存在感が得られるようになる手立てを、教師一人一人が授業、行事、部活動などの教育活動の中で意識して実践することが必要である。 ・PTAから保護者に情報発信し、できる活動を行っていく。	

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点の評価	目標達成度	課題・改善方策	
	生徒	保護者	教職員							
開かれた・信頼される学校づくり	①	①	①②	①学校運営協議会	学校経営への意見反映	・CSディレクターを軸にした協議会を学期に1回開催した。 ・新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた上での今後の授業・行事・部活動のあり方についての助言を随時反映させることができた。 ・次年度の学校経営方針について協議し承認を得た。	2	3	【課題】 ・学校運営協議会について、保護者の理解度が低い。 ・学校の現状に関する情報をさらに発信し、熟議に努める。 ・学校の状況や課題に関する情報提供に基づく協議が主となり、熟議や研修会を実施できなかった。 【改善方策】 ・HP、学校だより等による広報活動に努める。 ・PTAや地域の方と共に(コミュニティ・スクール)に関する研修を実施する。 ・CSディレクターをさらに軸とした運営を行う。	
				②学校評価	PDCAサイクルの実行	・学校評価資料として、7月と12月に自由記述も含めて個々の教員の授業アンケートを実施した。12月については7月との比較を行い、生徒の声を各教員の授業改善に反映することができた。 ・学校評価資料としてのアンケートを、昨年度と同様に実施した。 ・校長による分析を、職員会議等で共通理解し、各分掌において成果と課題を検討した。また、生徒、保護者の結果については経年比較を行い、現状の把握や学習指導及び生徒指導の改善に活用している。	3		【課題】 ・学校評価結果をもとに、各分掌で検討した内容を共通理解し、次年度の年間計画に反映させ具体的な学習指導や生徒指導として実施していく必要がある。 【改善方策】 ・行事や研修会毎のアンケートを活かし、次年度に向けて引き継ぎ改善していく。 ・学校評価結果を共有し、結果をふまえた年間計画等を組んでいく必要がある。	
	⑮	②③	③保護者・地域との連携	地域への公開、参観授業の実施	※新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、本年度は授業参観、オープンスクールは未実施(保護者の学校行事への参加 R2年度未実施、H31年度89.1%、 H30年度86.3%)	3	【課題】 ・感染症対策を講じた上での学校行事の実施。 ・各家庭への情報発信の工夫と促進。 (「学校は学校の情報を学校便り、学年便りやホームページ等」を通じて保護者に伝えている」 R2年度93.7%、H31年度91.2%、H30年度94.4%) 【改善方法】 ・学校行事等の実施の工夫 (学年別開催、オンライン開催、内容の見直し等の工夫) ・情報機器の活用による情報発信の工夫 ・学校ホームページの工夫と適切、かつ、効果的な活用。 ・ミマモルメへの加入の促進。			
				生徒、教師の地域行事への参加	・新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、例年、部活動生を中心に参加していた「夏祭り」や「餅つき」などの地域行事はすべて中止となったが、生徒会本部役員による「追悼のつどい」への参加等、実施された一部の地域行事への積極的な参加も見られた。 (全国学力・学習状況調査「今住んでいる地域の行事に参加していますか」 R2年度35.3%、H31年度42.3%、H30年度33.7% ※R2年度は全国調査未実施のため、自校実施・集計による)					
学校からの情報発信				・学校、学年・学級通信、保健だより等定期的な発行と学校HPへの掲載。 ・学校ホームページの刷新。 ・学校だより、学年通信の掲示板への掲示。 ・学校運営協議会における、学校教育活動に関する情報提供と共通理解。 ・校区内3小学校地区会への出席と、学校教育活動に関する情報提供。						
学校関係者の意見				【良い点】 ・地域コーディネーターの立場としては学校側の要望に応じて学校支援ボランティアを結びつけることができ、結局、学校側に笑顔が溢れたならば、良かったと思います。 ・学校だよりは丁寧でわかりやすい。	【課題】 ・コロナ禍の中で、どのようにして地域、保護者等との連携を図るか。 ・図書ボランティア活動が、細く長く地道に続くようにしなければならない。 また環境整備活動の面でも、保護者または地域住民からの協力体制を得る必要がある。 ・評価の観点「学校評価」に、アンケート結果を授業改善に反映できたとの記述があるが、生徒の授業評価アンケート結果にそれが表れていない。つまり、エビデンスのないことが自己評価として書かれている。 ・コロナ禍の中で見えてきた地域行事や交流活動の中止などの課題にどのように対応するのか、またこれまでの活動の代わりになるものはないかなど、ウィズコロナ活動をこの1年間で見つける必要があった。			【改善策】 ・コミュニティ・スクール、地域学校協働活動について、もっと保護者、地域に理解してもらう。 学校運営協議会として、何らかの発信が必要でしょうか。 ・学校HP、学校掲示板、学校運営協議会、地域学校協働活動、まちづくり協議会などを通じて、積極的な学校情報発信活動をすることによって、保護者だけでなく、地域住民が、学校に関心を持てるような工夫をこの時期にしておくことが必要である。		

※ 項目の評定については、生徒、保護者、教師のアンケート結果等から判断し評価する
(4:達成されている 3:ほぼ達成されている 2:あまり達成されていない 1:達成されていない)

4 自己評価における特記事項

・生徒アンケート結果(全学年)の経年比較(H30→R1→R2) 「学校へ行くのが楽しい」 80%→82%→75% 「学校行事は楽しい」 91%→91%→87% 「授業はわかりやすく楽しい」77%→78%→71% 「先生は生徒の悩みや不安に対して相談にのってくれる」86%→85%→83%	・保護者アンケート結果(全学年)の経年比較(H30→R1→R2) 「子どもは楽しく学校生活を送っている」 88%→86%→84% 「子どもは学校行事に積極的に参加している」 94%→93%→93% 「先生は、授業の工夫に努めている」 80%→77%→80% 「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」 71%→65%→66%
・保護者の期待度が高いと捉え対応することが必要である。 ・自己有用感をさらに上昇させるため、個々の生徒へのカウンセリングマインドをもとにした丁寧な対応や、授業改善の工夫が求められる。 ・講義形式の一斉指導型の授業を改善し、わかりやすく楽しい授業展開をすることで、行事だけでなく「学習が楽しいから学校が楽しい」と感じさせるような授業改善のさらなる工夫が必要である。	